

---

# 小さな時計屋さん

ルル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

小さな時計屋さん

### 【Nコード】

N0975T

### 【作者名】

ルル

### 【あらすじ】

私、工藤彩花は、恋をしています。中学で同じクラスになった岩倉友に、いつものように、遊んだ帰りに、友と一緒に帰ればよかったと後悔していると、見た事のない小さな時計屋さんを見つけた。入る中には、たくさんの時計と一人のおじいさんがいった。その、おじいさんは、勘がよく、それも私の心の中を読んでいる・・・ほんのりレトロナ、恋愛コメディー！

## いつもの様子(前書き)

初投稿です。よろしく、お願いします！

## いつもの様子

私の名前は、工藤彩花。ごく普通の中学生。ある日の出来事が、私の人生を変えた！部活帰り、私は、友達と歩いていた。「ねえ、今日も4人で遊ぼう！」「いつもの、調子で、3人に言った。「いいよ」「いつものことだろう」「俺も行く」3人からも、いつもの調子で返ってくる。あ、いい忘れたけど、私の友達とは、佐々木恵美、私の親友で幼馴染。岩倉友、中学で同じクラスになった男の子、今は、私が好きなお人。倉田敦也、中学で同じクラスになった男の子、明るい性格で、すごく優しい。「敦也の家で遊ぼうよ」「いいよ」「いいじゃん」恵美と友が、同意してくれた。「でも、俺の部屋、狭いぞ」敦也が、申し訳なさそうに、言った。「別にいいよ」「大丈夫」「いいいいじゃん」毎日のように、いつもの調子で、言った。「なら、いいや」敦也は、すっきりしたのか、楽しそうに歩いて帰って行った。私と恵美は、家が近く、友も同じ方向ではあるが、近いとは言えない。敦也は、逆方向で家も、私の家から、30分ぐらいはかかるころにある。「じゃあ、一時ね」「また、後で」私と恵美は、いつものように、手を振った。

## いつもの様子（後書き）

読んでいただき、ありがとうございました。続きは、おちおち書いていきます。

複雑な恋心（前書き）

2話です！よろしく願います！

## 複雑な恋心

昼ご飯を食べて、準備も済んだところに、恵美が来た。「行こう！」  
明るく、元気に言った。「うん！」私も、明るく返事をした。敦也  
の家は、山の方向にある。「結構、遠いいね」少し疲れたように恵  
美が言う。「うん、少し疲れた」そんな、弱音を言いながらも敦也  
の家に着いた。私がインターホンを押した。中から、「は〜い」  
敦也の大きい声が聞こえた。「おう！入って入って！」楽しそうに  
私達を誘導した。敦也の部屋に着くと、目の前に、友が座っていた。  
「おう！遅かったな」「そうでもないよ」私と恵美が声を合わせて  
言った。「何する？」敦也がみんなに問いかける。「なんでもいい」  
私と恵美が言った。敦也は微妙な顔をした。「みんなで、ゲームし  
よう」「賛成！」三人が、声を合わせる。時間は過ぎていき。「も  
私、もう帰るね。彩花はどうする？」恵美が私に問いかけた。「も  
うちよつと、いる！」私たちはテンションがあがり、みんな声ので  
かくなっていた。「じゃあ、また明日ね」恵美が、みんなに手を振  
る。「バイバイ」「また、明日」「じゃあね」私達も手を振った。  
「じゃあ、もう一回やったら、帰るね」「うん」敦也が元気よく、  
言った。「は〜い、負けちゃった。友は、まだ帰らないの？」「俺  
は、5時に帰る」「そう・・・じゃあ、帰るね！バイバイ！」「バ  
イバイ！」二人が手を振ってくれた。外に、出ると雨が降っていた。  
少し歩くと私は寂しくなった。(友、まだ来ないのかな)帰る方向  
が違うのに、そう思っていた。(もうちよつといて、一緒に帰って  
くればよかった)信号で待ちながら、雨の中でそう思っていた。(  
好きなのに、好きって言えないよ。だって、友達以上恋人未満だも  
ん)自分に言い聞かせた。(どうしよう・・・泣きそう)心が寂し  
い。一緒に帰ろう。なんて、言えない)半泣きな私。その時、なん  
となく上を見てみたら、そこには木で作られた小さな小屋があった。  
看板には、黒い字だけどかすれた字で、「時計」と2文字だけ書か

れていた。(時計屋さんかなあ?) なぜか、不思議な感じだった。  
(入ってみよう!) なぜだかわからないけど、その小さな時計屋さ  
んに入ってみた。



## 複雑な恋心（後書き）

2話目を読んでいただきありがとうございます。やっと、小さな時計屋さんを見つけましたね！3話目も、がんばります！

時計屋さんのおじいちゃん (前書き)

3 話目ですー！よろしくですー！

## 時計屋さんのおじいさん

時計屋さんに入るとそこには、掛け時計や鳩時計、腕時計が置いてあった。(すぐくレトロな時計)不思議とそう思う気持ちさせる場所だった。「いらつしやい」奥の方から、一人のおじさんが、顔をだす。「おじさんが、この時計屋さんをしてるの?」「ああ、そうだよ。もう、30年になるかね。」「おじさんは、ほのぼのと話してくれた。「ゆつくり、見ていってね」優しく、笑顔でそう言つて、奥へと引つ込んでいった。(すごいなあ、古い時計ばかり)私の年代にはわからない歴史ある時計ばかり。テーブルに置いてある時計をみた。腕時計と砂時計が置いてあった。(何これ)テーブルに置いてあった、一つの時計を手にとった。(恋が実る砂時計)こんなのを持っているからといって、恋が実るわけがない。「おじようちゃん」おじさんの声が後ろからした。「なんですか?」「おじようちゃんは恋をしてるね」おじさんの言葉が空気を変えた。「何を言ってるんですか!」大きい声で強く言った。だけど、少し慌てていた。「それだよ、それ」おじさんは私を指差している。いや、違う。私の持つている砂時計を指差している。「恋が実る砂時計」そこに書いてある言葉を読んだ。私は決心して、聞いてみた。「もし、好きな人と遊んだ後に家の方向が一緒なのに、「一緒に帰ろう」って言えなかつたら、後で後悔しますか?」私が少し恥ずかしそうに聞いた。「わしは後悔しないな」「なんですか?」また、質問した。「なんでって、後悔しても遅いからじゃ」「(は?)と心で思った。「どういうことですか?」またまた、質問した。「人生は一度きりじゃ、後悔しても時計のように時間を戻す事は出来ない」おじさんは優しく話している。「この後悔は後悔じゃない。思い出じゃ。思い出として、とつとくんじゃ」また、優しく話している。「そうだ!また、誘えばいいだ」大きい声で叫んだ。「そうじゃ。取り消しは出来ない、戻す事もできない。だけど、もう一度やり直すこと

はできる」「またまた、優しく話してくれた。「それ、持っていいぞ」「おじさんが袋をくれた。「いいの?」「ああ、いいぞ」「私は袋に砂時計を入れた。「また、来てもいい?」「お客さんもこないし、いつでもおいで」「ありがとう」「私は元気よくお店を飛び出しました。

時計屋さんのおじいさん（後書き）

3話目を読んでいただきありがとうございます。ありがとうございました。

「一緒に帰ろう!」(前書き)

4 話目です!よろしくお願いします!

「一緒に帰ろう！」

昨日のおじさんは不思議だった。なぜだか、全てを話せる気がする。「は〜今日、言えるかなあ？」独り言をいながら恵美と学校に登校していた。「どうしたの？」恵美が不思議そうにこつちを見た。「いや、いろいろあってね」私はあの事を恵美に言おうか言わないか。迷っていた。恵美は、私が友を事を好き。ということとは知らない。教室に入ると恵美は自分の席に座り、勉強の準備をしている。私はいつも、恵美以外の友達と話すが、今日は席に座り考え事をする。(今日、遊ぶ帰りに誘えるかなあ?)「は〜」大きいため息した。その時、「あはよう」元気よく、友が私の顔を覗いている。「お・おはよう」少し戸惑いながら挨拶をした。「元気ないねえ〜どうした?」「どうもしない」「そう。あ、おはよう」少し残念そうに言った。他の友達に挨拶をして、他の所に言った。(どうしよう。緊張する。)今日は部活がなく、午前授業で終わった。「ねえ、今日遊べる?」「うん。遊べるよ」「大丈夫!」「OK!」いつものように帰る4人。「じゃあ、また俺の家で遊ぼう!」敦也が元気に言った。「いいよ」「いいね」「OK」いつもの調子で3人が言った。(今日の帰りは誘えるよね)そう心に言った。前みたくゲームをしていると帰る時間になった。「じゃあ、帰るね」「バイバイ」「じゃあな」「じゃあね」恵美に3人が手を振った。「俺もそろそろ帰るわ」友が立ちながら言った。(よし、今がチャンス)そう決めて、息を一つ飲んだ。「私も帰る。友、一緒に帰ろう!」普通の事を、大声で言った。「いいよ!帰ろう」友が優しく答えてくれた。「じゃあ、帰るわ!」「私も」「じゃあね」手を振って、敦也の家を出た。(おじさん、ありがとう)そう心で言った。

「一緒に帰ろう!」(後書き)

4話目を読んでいただいて、ありがとうございます。5話目、がんばります! 応援よろしくお願いします。感想などは、どんどん書いてください!



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0975t/>

---

小さな時計屋さん

2011年5月9日17時40分発行